



Title	吐魯番出土文物研究会会報 第48号 : 特集・吐魯番の歴史と文化Ⅳ
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会会報. 1990, 48, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78858
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈翻 訳〉

吐魯番の歴史と文化(IV)

榮新江 著

青木 茂・關尾史郎訳注

◆五経と歴代史

中原や河西の士家・大族が高昌に遷入してくるにしたがって、麹氏高昌国の漢文化も一層の発展をみた⁽¹⁾。高昌国の王室麹氏は金城郡(現在の蘭州付近)に郷望を有する一族だったので⁽²⁾、中原の南北諸王朝との文化交流はひじょうに緊密であった。初代国王の麹嘉は北魏王朝に対して五経と史書を求め、かつまた国子助教の劉燮を招聘して、博士に任じて学生に教授させた。また第三代の麹堅は自分の居室中に「魯の哀公が政治を孔子に問うている像」を描いて仁政の象徴としたほどである。史書に記すところでは、高昌国で用いられていた言語と文字は中原とほぼ同じであり、国内には『毛詩』、『論語』、および『孝経』など儒家の經典があったほか、歴代の史書や、さらには各種の文集まであったという。これらの記述の信憑性は出土文書の証明するところとなっている。すなわち阿斯塔那の古墓からは、現在までに、『毛詩鄭箋』⁽³⁾、『孝経』⁽⁴⁾、『孝経解』⁽⁵⁾、および『論語』⁽⁶⁾などが出土しているのである。そのほかにも、一九八〇年から八一年にかけて、伯孜克里克千仏洞から古写本の『漢書・西域伝』の残片が⁽⁷⁾、また一九二四年に鄯善県、一九六五年には吐魯番県安楽城址から、いずれも『三国志・呉志』の残巻が出土しているし⁽⁸⁾、一九七二年には阿斯塔那一五一号墓から孫盛の『晋陽秋』残巻が出土している⁽⁹⁾。これらは高昌国内に「歴代史」が存在していたことを証明している。出土文書中にはこれ以外にも、さらに『謚法』⁽¹⁰⁾、詩文の原稿⁽¹¹⁾、および『書儀』⁽¹²⁾など、あるいは学童が漢文を学習するために書き写した『千字文』⁽¹³⁾、そして『乘法訣』⁽¹⁴⁾や『急就章』⁽¹⁵⁾などもある。

『毛詩』、『論語』、および『孝経』などは北魏・北周の両王朝の時代に最も流布した儒家の經典であり、当時の為政者がとくに重視したものである。北魏・北周との文化交流を通じて、この学風は高昌国内にも影響を及ぼしたことになる。編纂史料と出土文書は等しく、これら三部の經典が高昌国において占めていた位置を教えてくれるのである。高昌王は強力に儒学を振興したが、それというのも、漢文化の影響を利用して風俗を矯正し、「尊王攘夷」の思想に依拠して、この多民族地域における統治を強固なものにするためであった。麹氏高昌国の時代に漢文化が支配的な位置を占めており、その儒家思想は支配階級の主導的なイデオロギーであった。高昌国では公文書に漢文が用いられていたが、それにとどまらず、文書の格式や用語に至るまで、中原の漢・魏の制度をもとにしていたのである。

◆造寺と修窟

高昌国における漢文化の発展にともなって、中原に固有な道教も、この地でその勢力を増大させていった。阿斯塔那三〇三号墓の墓主である明威將軍・民部參軍の趙令達も道教の信者であった⁽¹⁶⁾。彼の遺族は、一枚の道教の符籙を墓中に副葬しているが⁽¹⁷⁾、これは、死者が速やかに道山に赴くことができるよう、守ってくれることを願ったものである。

しかしながら、道教にせよ、儒学にせよ、四世紀の初頭以来急速に台頭してきた仏教の勢力を阻止することはできなかった。麹氏高昌国時代になると、經典を書写するという行為以外にも、士家・大

族の勢力が拡大するのにしたがって、寺院の建立や石窟の開鑿といった行為が一時期の風潮となった。吐峪溝の千仏洞は五胡十六国の時代に開鑿が始められており、この時代には全盛期を迎えることになる⁽¹⁸⁾。また伯孜克里克的千仏洞もこの時代に開鑿が始められた⁽¹⁹⁾。現代まで保存されてきた高昌国時代の二点の造寺碑の銘文が、当時の状況をよく物語っている。

ひとつは、『高昌新興令麴斌芝造寺施入記』の碑で、その碑陰には『高昌綰曹郎中麴斌造寺銘』が刻されている⁽²⁰⁾。この碑は一九一一年の五月に、吐魯番の三堡の農民によって発見されたものである。その後、迪化（現在の烏魯木齊）の荷花池に運ばれ、次いで將軍署に移されて、碑亭によって保護されていた。しかしこの後、盛世才が基石として烏魯木齊のビルの下に埋めてしまったので⁽²¹⁾、現在ではその拓本が伝えられているにすぎない。さてこの碑を立てた麴斌芝（一名、麴斌）は高昌国の王室の出身で、第三代の王である麴堅の孫に当たり、第六代の王、麴寶茂とは従兄弟の関係にある人物である。彼は一九歳で高昌国の東部、横截県の県令に任命され、後に高昌城の北にある新興県の県令に転じた。彼はその立場上、新興勢力である突厥族の侵略を防ぐとともに、自ら使節を編成して突厥の可汗庭に赴き、高昌国の王室と突厥の可汗一族との婚姻を約して同盟を結んだ⁽²²⁾。この功績によって振武將軍・民部長史を授けられることになったのである。その彼が、建昌元（五五五）年の一二月二三日に、発願して亡き両親の恩徳に報いるため、とくに田地を供出して新興県城の西に一寺を建立して、永代の供養を行なうことにした。またこの時あわせて『造寺施入記』を撰し、これを碑に刻して立てたわけだが、そこには、高昌国の高僧たちや、国王の麴寶茂、高昌令尹（王太子）の麴乾固をはじめとする諸々の官人たちの名が刻されており、それによって「不肖の子孫や内姓・外族どもが、勢力に依倚して寺物を口侵する」ことを防ごうとしている。麴斌の死後、今度はその子の麴亮が麴乾固の延昌一五（五七五）年に『造寺銘』を撰して、寺院を創建した麴斌芝の事跡と寺院の縁起を述べ、あわせて麴斌一家の男女の供養人像を碑陰に刻した。これは、高昌国の王族が土地を寄進して寺院を建立したひとつの典型的な例である。

いまひとつは、『高昌主客長史陰尚口造寺碑』である⁽²³⁾。原碑は『且渠安周功德碑』とともに、プロシアの探検隊によってベルリンに持ち去られ、現在では所在がわからなくなってしまっている。高昌の陰氏は元來武威の郷望で、敦煌を経て高昌に移ってきた大姓である。陰尚口は高昌国の主客長史だったので、高昌城内に住んでいたはずで、その旧宅を寄進して伽藍を建立し、あわせて碑を立ててその功德を記念したのである。

麴斌や陰尚口のこのような田地や屋敷を寄進して伽藍を建立するといったことは、高昌国時代においては多く行なわれていた。吐魯番出土文書のなかには、長文におよぶ麴氏高昌国の仏教寺院のリストが含まれているが⁽²⁴⁾、その顕著な特徴は、苗字をもって命名された寺院がひじょうに多いということである。ざっとみただけでも、以下のようなものがある⁽²⁵⁾。陰寺、史寺、馮寺、善（鄯）寺、康寺、許寺、楊寺、侯寺、趙寺、韓寺、白寺、蘇寺、張寺、索寺、麴寺、令狐寺、闕寺、司馬寺、元寺、竺寺、黃寺、范寺、卜寺、左寺、員寺、曹寺、田寺、牛寺、樊寺、汜寺、婁寺、周寺、解寺、程寺、劉寺、画寺、隗寺、王寺、孔寺、安寺、鄭寺など四〇余りにも上る。このような氏寺のごとき寺院が数多く存在していたのは、高昌国の門閥士族が仏教界を支配していたことの反映であろう⁽²⁶⁾。一方仏教側も、先ず社会の上層に密着することによって、その勢力を急速に拡大することができたのである。このような事実を踏まえるならば、高昌城内や交河城内の要地に壮大な寺院や仏塔などの建造物があっても、けっして怪しむには足りないであろう。

高昌国の前期の王たち、例えば麴嘉や麴堅らはいずれも儒学を標榜して積極的
◆高昌王と仏教 には中原から儒家の經典を求めたが、高昌地区にも仏教が驚異的な勢いで発展して
くると、後期の王たちはその供養人の列に連なり、大いに功德のための事業を起
こした。

第七代の王、麴乾固は敬虔な仏教徒で、延昌三一（五九一）年には、一五〇部にも上る『仁王般若經』を書写させている。このうちの四点の異なった抄本の断片を、フィンランドのマンネルヘイム（Mannerheim）収集品⁽²⁷⁾、ドイツのグリュンヴェーデルとル・コック（Le Coq）収集品⁽²⁸⁾、およ

び日本の大谷探検隊の収集品のなかに見い出すことができる⁽²⁹⁾。このほか、イギリスのスタイン(Stein)収集品のなかには、この王が延昌三九(五九九)年に書写させた鳩摩羅什訳の『大般若波羅密經』の残片がある⁽³⁰⁾。その題記によると、この経は合わせて八部書写されたようである。ドイツの収集品のなかにも、延昌三七(五九七)年一〇月一六日に書写された『金光明經』の残片がある⁽³¹⁾。麴乾固の在位期間は四一年の長きに及んでおり、その間計り知れない人力と物力が写経事業に費やされ、膨大な数に上る大乘仏典が書写されたものと思われる。それこそ「功德は量るなし」というべきであろう。

麴乾固の孫に当たる第九代の王、麴文泰の仏教に対する妄信ぶりにはそれに勝るとも劣らないものがある。玄奘の弟子である唐の慧立と彦棕が著わした『大慈恩寺三藏法師傳』には、そのような彼の姿がじつに如実に描かれている⁽³²⁾。

唐の太宗の貞観元(六二七)年もしくは二(六二八)年—高昌王麴文泰の延壽四年か五年に当たるが—に⁽³³⁾、唐の三藏法師玄奘は仏性問題に関する論争に決着をつけるべく、西方、インドへ求法の旅に立った。彼はたった一人で、しかも老いた馬を連れ、天に飛ぶ鳥なく、地には獣も走らぬ莫賀延磧を渡りきって伊吾(現在の哈密)までたどり着いた。はじめ彼はそこから西北方に向かい、可汗浮図城(現在の吉木薩爾県北庭故城)を経てから西へ進むつもりだった。しかしちょうど高昌国の使者が伊吾から戻り、国王の麴文泰に玄奘が伊吾にいる様子を報告したのである。麴文泰はそれを聞くと早速重臣に立派な馬を数十匹ばかりつけて伊吾に派遣し、玄奘に高昌国へ向かうよう懇請した。玄奘は断わったがらちがあかないので、やむなく使者とともに高昌国に向かうことにした。伊吾から六日ほどで高昌国の白茆城に着いた。既に日は暮れかかっていたので、玄奘はここに逗留しようと思ったが、使者は王から厳命を受けていたので、都城はもう遠くないからと言って玄奘を説得し、元気な馬に換えて前進を続けた。夜半を過ぎてようやく都城に到着すると、盛大な歓迎のなかを王宮の奥殿に案内された。麴文泰は王妃とともにまだ寝入らず、読経しながら玄奘の到着を待ちもうけていた。対面がすむと、王は玄奘にいろいろな質問を浴びせかけ、空が白みかけた頃、やっと辞して王宮に帰っていった。空が明るくなっても玄奘は疲労困憊してまだ床にあったが、またもや王が王妃以下多数の人々を引き連れて伺候にやって来た。そして玄奘に王宮近くの道場を住居として提供し、宦官を護衛につけた。また高昌国の高僧たちに命じて玄奘のもとへ赴かせ、西方への旅を思い止まるよう説得させた。しかし玄奘はこれをきっぱりと謝絶して応じなかった。

十数日後、玄奘はいよいよ王のもとを辞して出立しようとしたが、王は強く慰留して、自分が弟子として終生法師に仕えるほか、国内の全ての人々も法師の弟子にさせるので、法師に經典を講義してくれるよう依頼するのであった。王はまた国内にいる数千の僧侶もみな法師の聴衆となることを約束し、法師に対して、もう西方への旅を断念するよう訴えた。しかし玄奘は断固としてこれに応ぜず、たとい肉体は王にもとに留まったとしても、我が精神はけっして留まることはないだろうとさえ言放ったのである。しかしどうしても両者が相持して譲らなかったで、王は以前にも増して供養につとめ、毎日自分で食事を届けたが、法師は水すら飲もうとせず、絶食によって西行の決意が固いことを示した。しかし四日目になると、玄奘はもはや息もたえだえの状態になってしまったので、さすがの王も玄奘の求めに応じるほかはなくなってしまった。そこで王と兄弟の契を結ぶこと、インドからの帰途にも高昌国に立ち寄り、三年ほどこの地に留まって弟子としての王の供養を受けることなどを条件として、彼の求めに応じたのであった。その上さらになお一か月ばかり留まって『仁王般若經』を講じるように求めた。その後、法師が講義するたびに、麴文泰は自ら香炉を持って法師が帳に入るのを迎え出て、三百人あまりの聴衆の面前でひざまづき、玄奘にはその背中を椅子のかわりに踏んで法座に着かせたほどであった。

高昌王麴文泰はまた、玄奘の西行のために至れり尽くせりの装備を整えた。先ず法師に仕える四人の沙彌、そして法服を三〇襲、防寒のためのベール(顔マスク)、手衣(手袋)、靴、および靴下などが数十点、さらに黄金百両、銀錢三万、綾や絹など織物五百匹は法師の道中二〇年間分の費用とし、これに馬三〇疋、従僕二五人をつけた。また各々大綾一匹をつけて二四通の書簡を持たせた。こ

れは高昌国以西の龜茲など二四か国に対して、玄奘が国内を安全に通過できるよう要請した内容のものである。最後に綾絹五百匹と車二台分の果物を、当時西域の覇主として君臨していた西突厥の統葉護可汗に献上する分とし、あわせて可汗に宛てた書簡をそえ、玄奘をインドまで護送するように依頼したのである。高昌王にとって、これは当時用意しうる最高の旅装にほかならなかった。玄奘がいよいよ出立する日には、高昌城の僧侶や大臣、そして庶民までが城を上げて見送りにでてきた。高昌王麴文泰は法師を抱いてしきりに慟哭し、自ら数十里ばかり同行してからようやく別れを告げたのであった。

この躍動感あふれる描写は、数百年後、呉承恩によって書かれた『西遊記』の描写と比べても遜色なく、ひたすら仏教に帰依した高昌王麴文泰の姿を彷彿させるのである。

【引用文献略号表】（第34号の凡例に上げたものは除く）

『考古圖譜』：香川黙識編『西域考古圖譜』下巻（国華社、一九一五年〈影印：柏林社書店、一九七二年〉）

『西域佛典』：井ノ口泰淳主編『西域出土佛典の研究－『西域考古圖譜』の漢文佛典－』（法蔵館・龍谷大学善本叢書1、一九八〇年）

「清理簡記」：吐魯番地区文物管理所（柳洪亮）「伯孜克里克千仏洞遺址清理簡記」（『文物』一九八五年第八期）

D. C. : H. Maspero; Documents Chinois, de la troisième expédition de Sir Aurel Stein en Asie Centrale (London, 1953).

C. B. : G. Schmitt, T. Thilo; Katalog chinesischer buddhistischer Textfragmente, Band I (Berlin, 1975).

【訳注】

- (1) 以下、本項全般に関わる最新の成果に、薛宗正「以儒学為主体的高昌漢文化」（『新疆文物』一九八九年第一期）がある。あわせて参照されたい。
- (2) 麴氏の来源については、王宗維「金城麴氏の活動及其族属問題」（『蘭州学刊』一九八六年第五期）が、沮渠氏と同じく盧水胡の出身で、金城に遷った一族であるとするが、実証的なお問題が残されているようである。
- (3) 「義熙寫本《毛詩鄭箋》殘卷」（73TAM524:33/4-1, 33/4-2, 33/1-2, 33/2-2, 33/2-1, 33/1-1, 33/3(a) 〈録〉『文書』Ⅱ、五〇～五八頁）。
- (4) 「古寫本《孝經》」（72TAM169:26(a) 〈録〉『文書』Ⅱ、二六八～二七二頁）。この写本については、嚴耀中「麴氏高昌時期的《孝經》与孝の觀念」（『中華文史論叢』一九八六年第二輯）、参照。
- (5) 「義熙元年辛卯抄本《孝經解》殘卷」（60TAM313:07/3 〈録〉『文書』Ⅱ、三五四頁）。
- (6) 「《論語》習書」（72TAM169:83 〈録〉『文書』Ⅱ、二七九頁）。
- (7) 「《漢書・西域傳》寫本殘片」（80TBI:001(a) 〈写〉「清理簡記」、図版壹-1 〈録〉同、五四頁）。
- (8) 一九二四年出土のものについては近年、大川富士夫「『古本三国志』をめぐる」（『立正大学文学部論叢』第六二号、一九七八年）が詳細な考証を加えており、出土地についても都善県説をしりぞけ、吐魯番県の可能性を提示している。また一九六五年出土のもの（〈写〉『出土文物』、二八頁図版四六 『新博』、図版八二）については、郭沫若「新疆新出土的晋人写本《三国志》殘卷」（『新疆考古』、所収）、参照。なお後者は『三国志・魏書』とともに出土しており、これについては、近年李遇春「吐魯番出土《三国志・魏書》和仏經時代的初步研究」（『敦煌学輯刊』一九八九年第一期）によって初めて紹介された。
- (9) 「古寫本《晋陽秋》（？）殘卷」（72TAM151:74(a), 75(a), 76(a), 77(a), 78(a), 78(a), 79(a)

- 80(a), 81(a), 82(a), 83(a), 9/1(a), 9/2(a), 9/3(a) 〈写〉『出土文物』、四四頁図版七一 〈録〉『文書』Ⅳ、一九九～二〇六頁)。なおこれについては、王素「吐魯番所出《晋陽秋》残卷史実考証及擬補」(『中華文史論叢』一九八四年第二輯)、町田隆吉「補修吐魯番出土「晋史」残卷」(『研究紀要』〈東京学芸大学附属高等学校大泉校舎〉第八集、一九八四年)、陳国燦・李微「吐魯番出土的東晋?写本《晋陽秋》残卷」(文化部文物局古文献研究室編『出土文献研究』北京 文物出版社、一九八五年)、および饒宗頤「敦煌與吐魯番寫本孫盛晉春秋及其「傳之外國」考」(『漢學研究』第四卷第二期、一九八六年)と、多くの專論がある。このうち町田氏は、その表題からも明らかのように、これを『晋陽秋』の残巻とすることには慎重である。
- (10) 「古抄本《諡法》」(60TAM316:08/3, 08/2 〈録〉『文書』Ⅲ、三六七～三六八頁)。
 - (11) 「殘詩文稿」(67TAM90:31, 32, 37/1, 37/3, 37/2 〈録〉『文書』Ⅱ、一九九～二〇三頁)。
 - (12) 「高昌書儀」(72TAM169:26(b) 〈録〉『文書』Ⅱ、二七四～二七八頁)。
 - (13) 「《千字文》習字殘卷」(72TAM151:68, 70, 69 〈録〉『文書』Ⅳ、二〇八～二一〇頁)。
 - (14) 「古抄本乘法訣」(60TAM316:08/1(b) 〈録〉『文書』Ⅲ、三六六頁)。
 - (15) 「高昌延昌八(五六八)年寫《急就章》古注本」(60TAM337:11 〈録〉『文書』Ⅴ、一二五～一三〇頁)。これについては、周祖謨「記吐魯番出土急就篇注」(同氏『周祖謨語言文史論集』杭州 浙江人民出版社、一九八八年、所収)、参照。
 - (16) 趙令達については、その墓表(「高昌延和元(五五一)年一月趙令達墓表」〈編号未詳〔録〕『新疆考古』、七四～七五頁)に、「虎口將軍・令兵將・明威將軍・民部參軍趙令達墓」とあるが、これは彼が生前歴任した官職をその順に列記したものであり、明威將軍と民部參軍を兼官していたわけではないと思う。
 - (17) 「符籙」(59TAM303:1/1 〈写〉『出土文物』、四三頁図版七〇 〈録〉『文書』Ⅱ、三三頁)。これについては、黄烈「吐魯番出土道教符籙与道教西伝高昌」(同氏『中国古代民族史研究』北京 人民出版社、一九八七年、所収)、参照。
 - (18) 閻文儒「新疆天山以南的石窟」(『新疆考古』、所収)、賈應逸「吐峪溝石窟探微」(《新疆芸術》編輯部編『絲綢之路造型芸術』烏魯木齊 新疆人民出版社、一九八五年、所収〈和訳：須藤弘敏訳「トユク石窟考」〔『仏教芸術』第一八六号、一九八九年〕〉)、参照。なお吐峪溝千仏洞の近況を伝えるものに、白須淨眞「崩れゆく第一級資料／初公開の新疆・仏教遺跡を訪ねて／痛ましい姿のトユク千仏洞／西大寺も大仏発掘めど立たず」(『朝日新聞』一九八七年一〇月三日、八版)がある。
 - (19) 閻、前掲「新疆天山以南の石窟」、柳洪亮「伯孜柯里克石窟年代試探－根拠回鶻供養人像対洞窟的断代分期－」(『敦煌研究』一九八六年第三期)、参照。なお寺院の建立については、王素「高昌仏祠向仏寺的演变－吐魯番文書札記(二)－」(『学林漫録』第一集、一九八五年)がその趨勢を知るのに有益である。
 - (20) 碑陽・碑陰とも録文は、池田温「高昌三碑略考」(『三上次男博士喜寿記念論文集』歴史編平凡社、一九八五年)、一一〇～一一三頁。
 - (21) 池田、前掲「高昌三碑略考」は、黄文弼が一九四四年に新疆を訪れた時点では既に原碑が所在不明になっており、その後の情報はとくにないとしている。
 - (22) 碑陰に記されたこのような麴斌に事跡については、關尾「高昌国における田土をめぐる覚書－『吐魯番出土文書』割記(三)－」(『中国水利史研究』第一四号、一九八四年)、参照。
 - (23) 録文は、池田、前掲「高昌三碑略考」、一一六頁。また侯燦「西域遺珍－高昌主客長史陰尚口造寺碑与李柏文書解読－」(同氏『高昌樓蘭研究論集』烏魯木齊 新疆人民出版社、一九九〇年、所収)、併照。
 - (24) 例えば、「高昌年次未詳信相寺僧尼名籍」(69TAM122:3/1, 3/3, 3/4, 4/1 〈録〉『文書』Ⅲ、三三〇～三三三頁)、「高昌年次未詳諸寺田畝帳」(67TAM92:49(b), 44(b), 50/1(b), 50/2

- (b), 45(b), 46(b) 跡 〈録〉『文書』V、一六七～一七四頁)、「高昌年次未詳諸寺田畝官絹帳」(67TAM92:47(a), 48(b), 42(a), 43(a), 51/1 〈録〉『文書』V、一七五～一七九頁)、および「高昌某歲諸寺官絹捐本」(67TAM92:46(a), 45(a), 50/2(a), 50/1(a), 44(a), 49(a) 〈録〉『文書』V、一八一～一八三頁)などがその代表的なものである。
- (25) 麹氏高昌国時代の苗字を冠した寺院については、池田、前掲「高昌三碑略考」や、小田義久「麹氏高昌国時代の仏寺について」(『龍谷大学論集』第四三三号、一九八九年)などにも列挙されており、栄氏の挙例は前者によっていると思われる。
- (26) 唐長孺「新出吐魯番文書発掘整理経過及文書簡介」(同氏『山居存稿』、所収)も、高昌国の豪族は政権ばかりか、宗教をも支配していたと説いている。たしかにこのような寺院の存在形態は、同時代の中国におけるそれとは明らかに異質なのであって、そこにまた宗教勢力と政治権力の関係の複雑で特殊な形態を見出すことができるのではないだろうか。この点については、町田隆吉「使人と作人—麹氏高昌国時代の寺院・僧尼の隷属民—」(『駿台史学』第七八号、一九九〇年)、参照。
- (27) マンネルヘイム将来漢文文書については、Kei Donner; Fältmarskalken, friherre Mannerheim(Helsinki, 1934) に集録されているというが、訳者は未見。また栄新江「欧洲所蔵西域出土文献聞見録」(『敦煌学輯刊』一九八六年第一期)によれば、そのマイクロフィルムが近年龍谷大学に収蔵されたとのことだが、これも未見である。さしあたり、Kudara Kogi(百濟康義); "Chinese Buddhist Manuscripts from Central Asia in the Mannerheim Collection" Proceedings of the Thirty-First International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa, II (Tokyo, 1984), pp. 995-997. なお、当該の写経の文書番号は、No. 22とNo. 63で、その写真(複写)は、百濟康義氏の第二回野尻湖クリルタイ(一九八九年七月二一日 於長野県野尻湖)における報告「ヘルシンキ大学ならびにイスタンブル大学に所蔵の中央アジア出土仏教文献紹介」のレジュメに付されている。
- (28) 録文については、大谷勝男「高昌麹氏王統考」(『京城帝國大學創立十周年記念論文集』史學篇、大阪屋号書店、一九三六年)、二六～二七頁、参照。
- (29) 「仁王經 卷上(並跋)」(〈写〉『考古圖譜』、佛典附録(一)の(2)『西域佛典』、Pl. LXXXIV 〈録〉『西域佛典』、一二六頁～一二七頁)。なお当写経の題記は紀年こそ延昌三三(五九三)年になっているが、本文は同三一(五九一)年のものと等しい。この点については、大谷、前掲「高昌麹氏王統考」、参照。
- (30) B. L. Or. 8212-660 (M405)-Toy. 042(a) 〈写〉D. C., Pl. XXXIV 〈録〉D. C., p. 177.
- (31) D. A. T. Ch. 1819 〈写〉C. B., Tafel. 24.
- (32) 以下は、『大慈恩寺三蔵法師傳』巻一の高昌国に関連する記述を要約したものだが、和訳にあたっては、栄氏の要約とともに原著である『法師傳』や、前嶋信次『玄奘三蔵—史実西遊記—』(岩波書店・岩波新書青版105=D 50、一九五二年)なども参考にした。したがって栄氏の要約と一部異なる箇所もあるが、煩雑になるので注記しなかった。
- (33) 玄奘の長安出立の年次については、近年公表されたものに限定してみても、桑山正進「玄奘三蔵の形而下」(桑山・袴谷憲昭『玄奘』大蔵出版、一九八一年)が貞観元(六二七)年か同二(六二八)年初めとし、楊廷福『玄奘年譜』(北京 中華書局、一九八八年)に至っては貞観元年八月と断定しているのに対し、松崎光久「玄奘の長安出発の年次について—梁啓超氏の論稿への批判を中心として—」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊第六集、一九八〇年)は貞観三(六二九)年説を堅持しており、定説は未だの感がある。

事務局(連絡先) 〒182 東京都調布市国領町5-19-14

荒川 正 晴 方 TEL 0424(81)4633

吐魯番出土文物研究会(The Research Society for Turfan Relics)